

エルムの文化誌

Thomas J. Campanella, *Republic of Shade: New England and the American Elm*

星野 勝利

吉野の桜、隅田川の桜、大阪造幣局の桜、ポトマック川畔の桜。日本人にとって、桜は、国を代表する花であり、樹である。国の紋章はもちろん菊の花。しかし、社会や文化の中で桜が占める比重はきわめて大きい。桜に対する思いの深さは、うたの世界でも顕著である。

世の中に絶えて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし 業平

たぐひなき花をし枝に咲かすれば 桜に並ぶ木ぞなかりける 西行

敷島の大和ごころをひと問わば 朝日に匂う山ざくら花 宣長

19世紀半ばの1842年、イギリスの作家ディケンズは、新興国アメリカを訪ねる。コネチカット州ニューヘイブンの町で街路樹の並ぶ美しい風景を眼にする。街路樹は、通りをはさんで、町と田舎がやさしく融和しあっている姿を示していた。さながら「旅の途上で出会った二人がたがいに手をさしのべ、にこやかに握手しているかのような眺め」であった。その街路樹は、エルム（ニレの樹）であった。

アメリカ東部、とりわけニューイングランド地方では、エルムは特別な樹である。街路樹としてなじみのもの、というだけではない。樹そのものに対する人々の愛着度でも、他の樹に勝るものがある。日本でいえば、さながら、桜である。いたるところで植えられ、歌としてうたわれ、生活や文化と一体化したもの。ディケンズが眺めたエルムの並木は、地元の詩人 Nathaniel Parker Willis によれば、さながら自然の聖堂のような世界であった。

... an unhewn cathedral, in whose choirs
Breezes and storm-winds, and the many birds
Join'd in the varied anthem.

ボストン近郊の湖畔の森で生活したソーローによると、ニューイングランド地方

でしばしば遠望されるエルムの大樹は、一種の「田園詩」(idyllic poem)である。近くに村や人家があることを示唆するだけでなく、そこで送られている家庭生活をも想像させる。「朝日に匂う山ざくら花」は「大和ごころ」を示唆した。空に向かって屹立するエルムも、生活や文化の表象となる。マサチューセッツ州シェフィールドのエルムは、シェフィールド・エルム (Sheffield Elm) として地元の人々に親しまれた。18世紀頃からは街の集会場として使われる。やがて、ある夏の日、白装束の子どもたちが歌を口ずさみながら、その巨樹の周りを回ることになる。

Father of elms! long may you stand,
A joy and wonder in our land;
A rallying spot for meeting gay,
With speech and song on a summer's day.

植民地時代以来ニューイングランド地方で親しまれたエルムは、アメリカ全土に拡がる。自然と文化のインターフェイスとして、1920年代には、約2500万本のエルムが合衆国全土を覆ったという。その後もその数は増し続け、エルム・ストリートということばもなじみのものとなっていく。「街の中の田舎」(*nus in urbe*)として人々に憩いと安寧の空間を提供していく。

このように親しまれてきた国民的樹木エルムにも、やがて運命の時が訪れる。ニレ立ち枯れ病(*Dutch elm disease*)が突然襲いかかり、1960年代にはアメリカ全土で約三分の一のエルムが死滅する。1980年代までには7700万本のエルムが失われたという。この事態を、どう打開するか。目下、さまざまな取り組みが、合衆国全土で試みられている。

エルムにまつわるこのような事情を、本書は詳細に語ってくれる。全8章の第1章は、白人入植者のエルムに対する思いについてくわしい。「エデンの森」としての新世界に入った入植者たちは、そこでエルム (*Ulmus americana*) の勇姿を眼にする。インディアンの焼き畑農業の犠牲となる事を免れたこの樹は、旧世界のそれよりも、背丈が高く、見た目も優美であった。屋根葺き用材、食器材、カヌー用材、樹皮を使ったロープ、樹皮をすりつぶした止血剤。インディアンにとってこの樹は役に立つ樹であった。白人入植者たちはしかし、用途の少ない「くず木」(*trash tree*)とみる。ただし、適度に日光を通すその樹形から次第にその役割が認知され、作物に障害を与えることの少ない樹、区画を示す境界樹、家畜用の日除の樹として、次第に重宝がられ、母国イギリスでオークやエルム(*Ulmus procera*)を愛していた入植者たちにとって、格好の代替樹となる。かくして、コネチカット川流域などでは、

川べり、農地、宅地の庭などで、ピクチャレスクな美しい姿を数多く提供することになる。夕陽に輝くエルムの樹は、ヤンキー・パストラリズム (Yankee pastoralism) の典型として、トマス・コールなどハドソン・リバー派の画家たちが好んで描く構図ともなる。さながら、ニューイングランド版「朝日に匂う山ざくら花」である。

第1章がエルムの地域文化誌とすれば、第2章は家庭文化誌、あるいはコミュニティ文化誌である。入植者の郷愁を刺激するエルムは、個々の家庭に入り込む。新築の家の陽よけの樹として、避雷針として、結婚記念樹として、さらには家族の交遊の記念樹として植えられる。ホーソーンの『七破風の家』(*The House of Seven Gables*)は、ボストン近郊セイレムの街の旧家ピンチオン家の物語である。この家の軒先にも見事なエルムが茂っている。先祖によって植えられたエルムは、樹齢100年になんなんとする巨木である。

It had been planted by a great-grandson of the first Pyncheon, and, though now fourscore years of age, or perhaps nearer a hundred, was still in its strong and broad maturity, throwing its shadow from side to side of the street, overtopping the seven gables, and sweeping the whole black roof with its pendent foliage. It gave beauty to the old edifice, and seemed to make it a part of nature.

家庭のシンボルはコミュニティのシンボルとなる。マサチューセッツ州ピッツフィールドの町の中心部には、巨大なエルム(Pittsfield Elm)が茂っていた。町の歴史は、このエルムを眼にした入植者たちが周りに家を立て始めたことに始まる。以後このエルムは、共有財産として保護され、集会の場、儀式の場となっていく。似たようなケースは他にも少なくない。ボストン・コモンのエルムは、対英独立戦争をくり抜けた「自由の樹」(Tree of Liberty)として愛され、プロビデンスのエルムも、ハーバード大学キャンパスのエルムも、それぞれの歴史を抱える。ニューイングランドでは、コミュニティの中心部に教会が位置することが少なくない。教会とエルム。ここに、もうひとつのニューイングランド的構図が生まれる。聖なるものの表象としてエルム、インディアン人のトーテム的役割を持つエルム、旧世界の春祭りのメイポール (maypole) としてのエルム。第2章はこれらのことを、写真資料を添えて教えてくれる。

第3章は「歴史証人樹」(The Witness Tree)として社会を見つめてきたエルムの話。スプリングフィールドのエルム、ボストン・コモンのエルム、ニューヘイブンのエルム(Benjamin Franklin Elm)、ケンブリッジのエルム(Washington Elm)。続く第4章は「エルム・ストリート」形成史、そして環境意識の目覚めと都市計画への胎動。第

5章はマサチューセッツの寒村シェフィールドで始まった「ツリー・ビー」(Tree Bee)について。すなわち、一人一本エルム植樹(every one an American elm)の運動、これが契機となる村おこし、その法制化、エルム協会の創設、そして文人や画家たちとの関わり。第6章はこの都市版。ニューハンプシャーのキーンとポーツマス、コネチカットのニューヘイブンとマサチューセッツのケンブリッジのケース、そして、功労者ジェームズ・ヒルハウスとジェームズ・ヘイワードのこと。なぜエルムはかくも愛されるのか。第7章は文明化・都市化の歴史がこの秘密を解くカギであることを示す。最終第8章は待ち受けていた悲しい出来事。突然襲った恐ろしい病害と生々しいその実態。エピローグは復活を願うさまざまな取り組みの紹介。新種育成を目指す科学者たちの取り組み、防止薬物開発の努力、そして次代を担う若者たちの植樹プログラム、等々。これが本書のおよその概要である。

アメリカ合衆国の紋章はハクトウワシ (bald eagle) である。植物ではなく動物である。動物が象徴的役割を果たす例は、日常的にもしばしば目に触れる。しかし植物の出番も、ないわけではない。合衆国では各州で定められた州木がある。ニューイングランドの場合、メイン州はマツ (white pine tree)、ニューハンプシャーはシラカバ(white birch)、バーモントはメイプル(sugar maple)、ロードアイランドもメイプル(red maple)、コネチカットはオーク(white oak)である。そして、マサチューセッツは、エルム(American elm)である。

エルムはマサチューセッツの州木である。この州木の果たす役割は大きい。日本でおそらく桜が菊に勝るように、合衆国では、エルムがハクトウワシに勝ることもありうる。植民地時代以来、エルムに対する人々の思いは深い。とりわけニューイングランドの人々にとって、この思いにはきわめて熱いものがある。

From cradle to grave, elm trees bore the very identity of the New England people.

ニューイングランドの文化誌としてのエルム。空に向かって枝を広げる大樹には、人々を魅了してやまないオーラがみなぎっている。

(Yale University Press, 2003, xi + 228pp.)

(岩手大学教育学部英語教育講座)